

中井竹山と会沢正志齋による仏教批判

栗 本 眞 好

序 江戸時代後期の仏教批判

欧米列強の脅威が、我が国に近づきつつあった江戸時代後期は、為政者や国学者たちにとって、基督教への警戒心と同時に、神道への帰一を、民衆に求める傾向が強まっていた。

すでに、江戸時代初期には、山崎闇斎の垂加神道のような仏教批判を前提とした神道帰一の思想が萌芽していたが、後期になると、より一層、その傾向が強まり、懷徳堂学派、水戸学、津和野学といった学派が、武家を中心に広がっていった。

今回取り上げる中井竹山の『草茅危言』と、会沢正志齋の『新論』は、懷徳堂学派と水戸学のそれぞれを代表する警世の書であり、神道もさることながら、上古以来、我が国の為政者たちの基礎教養であった儒学の教えを基調としている共通の面がある。

二つの警世の書を比較することによって、江戸時代後期の

国学の発達に、仏教への批判精神がいかなる影響を与えたのかという問題について検討を試みる。

一 中井竹山の『草茅危言』

寛政元（一七八九）年に、老中・松平定信に上申された『草茅危言』では、飛鳥時代の崇仏派の代表格である蘇我馬子や聖徳太子、中世に禅宗を積極的に取り入れた北条氏や足利氏を強く批判したうえで、浄土真宗の僧たちや、戒律を守る姿勢にかけた僧たちを批判していることから、仏教を儒学と比較して、治世に害が及びやすい宗教ととらえていることがうかがえる。

北条禅法を崇び、足利に五山を重んずる坏、誠に厭可事ども也（中略）、仏氏世を誣ひ民を惑すの説、後世諸宗を分、色々と云と立れども、就中此害尤深きは一向宗也、是独其説張皇して、愚民を引込、手広く成たるのみに非ず、昔天文の比、一向僧其富有に乗、世の大乱を幸として、兵器を蓄へ、浪士を招、信徒せざる郡邑を攻伏

せ劫かして、其宗門に帰せしめ、夫故甚猛勢に成たる也（中略）、武門に及、鎌倉の諸寺は言に及ず、足利氏亡たるに、天龍、等持、相国、銀閣は依然たり、細川勝元灰滅して、龍安寺、臨川寺は自若たり、豊家祀らざるに、方広依然として、高台も未地に墮ず、皆何れを檀越と恃む事可無て長く存るは誠に怪む可者なれども、全国家の広慈を以、故事を廃せず、曾て旧惑して崇奉有にはあらで、止事を得ず、仮に檀越と成て、田禄を給し遣さると云者なれば、国家には美意なれども、諸寺に於は冥加も面目もともに無事成可（中略）、大坂中の寺院、諸宗の僧侶、戒律を破り、放逸無慙の体たらく言語に絶したる事也、平生寺中にて酒肉を貪り、公然として青樓華街に入は云に及ず。⁽¹⁾

竹山の非難・攻撃の対象は仏教のみにとどまっていけない。「崇神佞仏」という、いわば宗教行為一般にその対象が拡がっている。その理由は、家康が若年のおりに苦しめられた三河の一向一揆のように、幻想形成力が備っていること。もうひとつの理由は、国家経済上の損失になっている点である。歴代の寺院に対して、単に「故事ヲ廃セズ」という「国家ノ広慈」から「止事ヲ得ズ仮ニ檀越ト成」って維持にあたる結果、「廣大無用ノ御費」になつてゐる。「国家ハ追々抛ナキ新ナル経費モ起」こつてくるのであるから、そのような「無用ノ費」は抑制すべきで、そうすることがかえつて「仏氏ノ所謂盛者必衰ノ理ニ叶フ」と主張したという考察や、⁽²⁾『草茅危言』における竹山の議論の軸は、あくまで朝廷が衰微した原因として

中井竹山と会沢正志斎による仏教批判（栗 本）

の「崇神佞仏の惑」の根深さについてであり、徳川將軍家の支配の正当性にはないとする指摘もあるように、⁽³⁾『草茅危言』は、現在で言うところの政教分離の必要性を強調している。

二 会沢正志斎の『新論』

『新論』は、『草茅危言』から遅れること、三六年後の文政八（一八二五）年、幕府が異国船打ち払い令を出した年に、正志斎から水戸藩主・徳川斉脩に上程されるが、公刊は見送られた。『新論』でも、『草茅危言』同様に、聖徳太子や蘇我馬子に批判を加え、大宝令のなかで、僧尼を外交を統括する玄蕃に管理させていることを根拠に、仏教を外來の宗教としていたと主張する。

仏法の中国に入るや、朝議謂らく、国家に祠典あり、よろしく蕃神を拜すべからず、と。しかるに逆臣馬子、私かにこれを奉じ、皇子厩戸らと党比して、伽藍を興造す。これより僧徒日に衆く、争ひてその説を鼓し、民の志ここにおいてか離渙せり。大宝の制に、神祇を太政の上に列し、僧尼を玄蕃に隸するは、国体を知れりと謂ふべし。然れどもなほ祭政を分ちて二となすを免れざりしは、当時の人情世態、すでに往日の統一なるがごときにあらざればなり。而して聖武・孝謙の朝に及んでは、すなはち仏事ますます盛んにして、朝政廷議も、仏を奉ずる所以にあらざるものなく、遂に国分寺を諸道に置きて、国府と並立し、以てその法を国郡に布き、仏事をして政と一たらしむ。上の好むところ、用ひて以て政をなせば、これが下

中井竹山と会沢正志斎による仏教批判（栗本）

たる者、たれか争ひてこれに趨かざらん。ここを以て天下靡然として、ただ蕃神をのみこれ敬す。本地の説作るに及んでは、赫赫たる神明も、冒す仏名を以てす。天を誣ひ人を欺き、吾が民の瞻仰するところのものを挙げて、ことごとく胡神の分支末属となし、神明の邦を変じて、以て身毒の国となし、中原の赤子を駈つて、以て西戎の徒属となす。内すでに自ら夷となれば、国体いづくんぞ存せんや。故に後白河上皇の尊を以てして、山法師の制し難きを嘆ぜしめたまふ。時勢また見るべきなり。一向専念の説作るに至りては、すなはち名祠・大社の祠典に在るものといへども、これを贍礼するを許さず、以て本に報い始めに反るの心を遏絶して、専ら胡神を奉ぜり。民ここを以て西戎あるを知りて、中原あるを知らず、僧尼あるを知りて、君父あるを知らず。その叛乱するに及んでは、すなはち義に仗りて賊を討つ者を指して、以て法敵となし、すなはち一時、忠烈の士をして、弓を挽き戈を揮ひて反つて君父に仇せしむるに至る。忠孝の廢し、民志の散ぜるは、極れりと謂ふべし。

『草茅危言』と『新論』の仏教批判を比較すると、二つの共通点が見出される。

一つは、仏教に関して、迷信によって、大衆を惑わす恐れがあるのとらえていること。二つ目に、同じく外来の思想である儒学を基調としつつ、仏教は儒学とは異なり、経世済民を妨げる恐れの大きな思想ととらえていることである。

このことから、竹山と正志斎は、当時予想された海禁体制が維持できなくなった次の時代において、一定の基準を満たしたものに限って、輸入すべきと考えていたことがうかがえる。

- 1 『草茅危言』懷徳堂記念館、昭和一七年（四）二二頁。
- 2 小堀一正「中井竹山の歴史観——その排仏論を中心として——」『梅溪昇教授退官記念論文集』思文閣出版、昭和五九年（五七）七六頁。

3 清水光明「御新政」と「災後」——天明の京都大火と中井竹山——『日本歴史』平成二四年二月（三四）五一頁。

- 4 『日本思想大系』五三、昭和四八年（六五）六七頁。今井宇三郎「水戸学における儒教の受容——藤田幽谷・会沢正志斎を主として——」『日本思想大系』五三（五二五）五五五頁）では、会沢の立論の根拠には常に聖人の聖教が援用されるが、その聖教の内でも『尚書』『周官』『周易』の三経が最も有力である。会沢の経伝研究において、この三経に特にその精力を傾倒している所以でもあるが、その三経の中でも特に『周官』に対して努力を集中し、奉天慎祀、報本反始の思想が、『尚書』の各篇に見えるところのは、明示したところであり、これが国体観と深く結びつくとし、さらに、会沢の尚書学においては、かく受命を前提の事実として専ら受命者の実践倫理を強調すると共に、帝と天を同一視して専ら帝の理念によって天を理解する姿勢が顕在すると述べている。尾藤正英「水戸学の特質」『日本思想大系』五三（五五六）五八二頁）では、尊王思想とならんで、会沢の政治論の重要な内容をなす攘夷論も、やはり国家の統一強化という目的を達成するための、一種の方策ないし手段としての性格をおびていた。『新論』の全体が対外的危機の意識に支えられ、本書の中ではしばしば、この打払令の公布が英断として賞賛されている。しかしそれは打払令が、弛緩した人心を鼓舞して国家的統一性をとり戻すための、あるいは夷教に誘惑されることを防止するための、何より

の好機を作り出したと考えられたからであって、必ずしも法令に盲目的な攘夷を實行しようとする意味ではなかったとする。後藤広子「会沢正志斎における国体」『日本大学精神文化研究所教育制度研究所紀要』八、昭和五二年（一〇一九頁）では、会沢の天人合一は、中国古代の天命思想、つまり「宇宙の主宰者としての天は超越的な存在として高く上に在って万物を照らし、あらゆるものは天を本としこれを親として、ただ天の下に全然屈服して従って行く」というみかたが、根底にあると考えられ、尊王・敬幕という統一的な忠誠の理念をかかげてはいても、政令は一本に統一され、それはあくまでも幕府より発せられるべきものという、幕藩体制下における理を貫かなければならなかったとする。星山京子「国学と後期水戸学の比較——統治論における民と鬼神を中心に——」『季刊日本思想史』四七、平成八年（一〇〇〇—一〇四頁）では、会沢の意識においては、民は徹底して「愚」で「弱」で、たとい体制に不満を持ったとしても主体的に為政者に働きかけたり、改革を求めたりするはずもない、受動的な存在であり、会沢が理想とした統治は人民を国家的利益のもとに操作することにあり、それは土俗の信仰や民の自然の情を抑圧することによって成立するものであると結んでいる。高山大毅「遅れてきた古学者——会沢正志斎の位置——」『季刊日本思想史』七九、平成二四年（一〇四〇—一〇四一頁）でも、正志斎は、「論礼者可不審察聖人制礼深意所在乎」（礼を論ずる者は審らかに聖人礼を制するの深意の在る所を察せざる可けんや）ということから、正志斎は徂徠の礼解釈に多くを学び、「天朝」の「礼」の「深意」を探ったのであろう。正志斎の学問は仁齋学と徂徠学の巧みな融合であると結論づけている。

中井竹山と会沢正志斎による仏教批判（栗本）

〈参考文献〉

- 今井宇三郎「水戸学における儒教の受容——藤田幽谷・会沢正志斎を主として——」『日本思想大系』五三、岩波書店、昭和四八年、五二五—五五五頁）
- 後藤広子「会沢正志斎における国体」（『日本大学精神文化研究所教育制度研究所紀要』八、昭和五二年、一〇一九頁）
- 尾藤正英「水戸学の特質」（『日本思想大系』三三、岩波書店、昭和四八年、五五六—五八二頁）
- 小堀一正「中井竹山の歴史観——その排仏論を中心として——」（『梅溪昇教授退官記念論文集』思文閣出版、昭和五九年、五七—七六頁）
- 星山京子「国学と後期水戸学の比較——統治論における民と鬼神を中心に——」（『季刊日本思想史』四七、平成八年、一〇〇〇—一〇四頁）
- 清水光明「御新政」と「災後」——天明の京都大火と中井竹山——（『日本歴史』平成二四年二月、三四—五一頁）
- 高山大毅「遅れてきた古学者——会沢正志斎の位置——」（『季刊日本思想史』七九、平成二四年、一〇四〇—一〇四一頁）

〈キーワード〉 中井竹山、『草茅危言』、会沢正志斎、『新論』

（学習院大学科目等履修生）